

## 緒方洪庵と適塾

埼玉県

大河原 晃

はじめに

江戸時代の医学は、大別すると漢方医学とオランダ医学（蘭医学）の２種類である。

我が国にオランダ人が始めて来朝したのは、慶長３年（１５９８）頃と言われているが、西洋医学に対する関心は、江戸中期８代将軍吉宗の時代から高まっていった。そして幕末、緒方洪庵（１８１０～１８６３）が出現し、大坂で医業を行う傍ら、「適塾」を開き、蘭学を教えた。

今回は、文久２年幕府の奥医師兼西洋医学所頭取として江戸に招聘される迄の２４年間、ここを根城として活動した、「緒方洪庵と適塾」について検討してみたい。

緒方洪庵の背景

洪庵は、４人兄弟の末っ子で、備中（岡山県）に生まれ、大別すると５つの転期に分かれる

### 第１の転期

足守藩蔵屋敷の留守居役を命じられた父と、大坂に住み着いた。洪庵は、大坂で暫く文武の道を学んだが、病気がちで十分勉強ができなかった。たまたま中天游と言う西洋医学の専門の先生を知り、４年間西洋の学問、医学書を学んだ。しかし、中天游は、あまりオランダ語を読めなかった為、原典を直接学ぶことを勧めた

### 第２の転期

文政１３年４月（１８３０）江戸へ行き、当時江戸の蘭医学の大家、坪井信道の門に入る。洪庵２２歳である。ここで洪庵は、暇な時には義眼を作ったり、時には按摩に出かけて学資を稼ぎなら、４年間学ぶ。原書を数十冊

読み相当な成果が得られた様である。途中坪井信道の恩師である宇田川榛齋に、内外の薬品の事を学んでいる。

### 第3の転機

天保6年2月江戸を去り、郷里に帰るが、一時大坂へ出て中天游の子耕介を助け蘭学を教える。しかし、天保7年2月(1836)長崎遊学の為、中天游の子耕介を連れて、大坂を発つ。この時「判平」から「洪庵」と名を改める。27歳である。長崎では2年間勉強し、ニーマンに学んだと伝えられているが、遊学中の様子は明かでない。

### 第4の転機

天保9年1月長崎を発ち、一時足守に帰るが、再び大坂に出て、瓦町で医業を行う傍ら、「適塾」を開き蘭学を教える。29歳である。開業してまもなく、摂津名塩の医師億川百記の娘八重をめとる。大坂での24年間は、多方面で活躍し、医者としては特に種痘事業に力を尽くした。そして塾も瓦町から過書町に天保14年移った。現在も、ほぼ原形を維持し、大阪大学の管理下にある。

### 第5の転機

文久2年(1862)蘭学者の伊東玄朴等の薦めにより、江戸幕府の奥医師に招かれ、それと共に現在の東京大学医学部の前身である西洋医学所の頭取も兼任する。しかし大坂から江戸へ出て来て僅か10ヶ月しか経たない内に、昼寝から目覚めて突然の多量の喀血で窒息死する。54歳である。

### 洪庵と適塾

洪庵の蘭学塾を「適々齋塾」略して「適々塾」または「適塾」と言った。この名は、洪庵の号が「適適齋」で

はあるが、開業当初から付いていた様である。「適々」は莊子の太宗師篇の一編に由来し、「自分の心に適する所を適として楽しむ」と言う意味である。

さて過書町の適塾は、約140坪と言う大坂によくある間口が狭くて、奥行きが深い土地にたった住居である。1階の奥の方が洪庵の家族の住居で、2階と階下の一部が書生の部屋に当てられていた様である。書生の為の大部屋は、約30畳で決して広くはなく、多い時は、数十人も居た言うから、せいぜい一人畳一枚位なものであったろう。塾に出入りした者は、16, 7歳から22, 3歳位の若者で、大村益次郎、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎、福沢諭吉等錚々たるメンバーである。

適塾は、学級を設け、組織だった蘭学教育を行っていた。塾は塾頭とその下の塾監により管理されている。学級は、文法を習う初級から、高度な原書を勉強する1級迄、凡そ8級ある。文法の本は、当時文法論であるオランダ語の「ガランマチカ」、そして文章論の「セインタキス」である。各級は毎月6回、凡そ5日おきに「会読」を行う。各級は10人から15人位からなり、各級に「会頭」がいる。会読は、予め教材のどこを会読するかと言う事を決めておき、会読の当日に、クジを引いて席を決め、順番に数行づつオランダ語を解釈させる。そしてその後質問をさせ、討論をした様である。この会読の結果会頭が成績をつけて、各級で3ヶ月首席を続けると、一つ上の級に進むことができた。文法が終わると、後は会読ばかりで、一冊しかない原書を、皆が筆写しなければならない。辞書は「ズーフ」と呼んでいたズーフ・ハルマの蘭和辞書と、上級者のウェーランドのオランダ語だけで書いた辞書があっただけで、会読の前夜には、この辞書がおいてある部屋（ズーフ部屋）には、夜通しロウソクの火が灯っていたと言う。福沢諭吉によると、教材になる原書は、医学、物理学の

本をあわせて10冊もなかったと言う。当時原書が如何に入手しにくく、貴重で尚かつ高価なものであったが分かる。因みに当時「ワンダーベルト物理書」と言うのが、80両で約640万円もしたと言う。この様に貴重な本は、藩主に買ってもらい、蘭学者が借りて読んだと言う。そして会読が終わると、塾生はどっと市中に繰り出し、手がつけられないほど大騒ぎをしたと、福沢は自伝の中で語っている。また長与専斎は、「元来適塾は医家の塾とはいえ、その実蘭書解説の研究所にて、書生には医師に限らず、兵学家、砲術家、本草家等凡そ当時蘭学を志す程の人は皆この塾に入りて支度をなす」と言っている。

考察

洪庵が大坂で適塾を開いた背景には、師中天游の学統を継ぐという理由もあったであろうが、その奥にあった、中天游に至る迄の大坂の蘭学風土があった上での事であると思う。大坂の蘭学そしてその基礎となる実証精神の起源は、蘭学とは関係ない大坂の風土から生まれたものと言える。例えば大坂で始めて蘭学研究グループを作った橋本宗吉の医家グループからは、腎臓が血液の濾過装置である事を世界に先駆けて見つけた伏屋素狄や、「整骨新書」で知られている各務文献等がある。大坂やその周辺の風土の中で、橋本宗吉に学んだ医学者グループの一員であった中天游の下で、蘭医学の修業を始めたのが緒方洪庵であった事からも頷ける。しかしここで気になるのは、適塾の時代に洪庵と門下生の間に、これに匹敵する様な創造的な仕事をした人は見つけにくい。それは当時ペリー来航等外圧もあり、いち早く西洋文化を日本へ吸収するのが先決で、押し寄せる多くの情報が創造的発意の芽を摘んで行っただのではないかと思う。

まとめ

拙速主義的脱亜入欧論には、充分議論の余地があると思

うが、その様な中、適塾は「国のため。道のため。人のため」に、役立つ人物を輩出する礎になったは事実である。また一方適塾の人が創造性に本来欠けていたのではないかと言う見方もあるが、時代の趨勢が、それを許す環境には無かったのではないかと思う。

#### 参考文献

緒方洪庵伝 緒方富雄著 岩波書店 他